気になる子という見方を変える
～配慮児への関わり方と保育実践～

ChaCha Children Makuhari
園長　藤森亜沙美

法人ビジョン

Education is Empathy

～よりよく理解しあうことで、世界は変わる。～

“気になる子”

どんなところが気になるか？

保育士の意識は　クラスの空気に影響し

そしてそれが園の空気を作り出す

モーニングトーク

①子どもも大人も対等

②その場にいない子のことを考える

③多様な考えや、やり方に触れる

④決まりを伝える時間でなく、
　決まりを一緒に考える時間に

①子どもも大人も対等

②その場にいない子のことを考える

インクルージョンの本質は、みんなが共にいて、みんなが充実して遊び、学べているということです。「みんなが共にいる」というのは、物理的な場所を共にするということに留まりません。同じ場にいても、お互いに関心を向けていなければインクルージョンではありません。違う場にいて違う活動をしていても、心理的に「一緒にいる」とお互いが感じていれば、学び合う関係が構築されて、みんなが学べるようになるのです。**つまり、インクルージョンとは、それぞれに学びの場があり、お互いに関心を向け合っている状態と言えます。**

＜「特別な配慮を必要とする子が輝くクラス運営」P75抜粋＞

＜事例　～モーニングトーク～＞

自閉症スペクトラム障害のTくん。長時間椅子に座り集中して話しを聞くことが苦手です。数字が好きな為、日付の確認などは楽しんで参加するけれど、対話の時間は苦手でモーニングトークに全て参加できないこともしばしばあります。Tくんに気持ちを聞くと「ソワソワしちゃう」と話す為、保育士はそんなTくんの気持ちをクラスの子どもたちにに伝えてきました。

「Tくんは数字が好きだから、日付の確認は楽しんで参加できるんだ。でも座ってお話を聞くのは苦手で、ソワソワしちゃうんだ」「みんなにも得意なことと苦手な事があるよね。先生はピアノが苦手だから、すごく頑張って練習しているけど、〇〇先生みたいには上手には弾けないんだよね、これはいけないことかな？」というように、苦手な事は誰にでも、もちろん保育士にもあるということを伝えていました。

数か月たって、少しずつ座れる時間も増えてきて、時にわざと座ろうとしない姿も出てきたTくん。そんな姿に対して保育士がTくんに座るよう声をかけると、同じクラスのSちゃんは保育士に対して「〇〇先生だめだよ！Tくんは今ソワソワの時間だから、無理に座らなくてもいいと思う」と保育士に注意をしました。

③多様な考えや、やり方に触れる

・正解のある質問よりも、答えのない対話を楽しむ。

・一人ひとりの意見に対して、反応に差をつけない。

・Myフィーリングで気持ちを見える化

④決まりを伝える時間でなく、決まりを一緒に考える時間に

（事例）モーニングトークで＜先生に言わずに部屋いってはいけない＞というルールについて話し合いました。Sくんが「勝手に出たらだめなんだよ」と話すと、Rくんも「そうだよ、先生に言わないとだめなんだよ」と続けます。保育士が「そっか、じゃあそういう子を見たらどうする？」と聞くと「だめっていう！」と皆が答えます。そこで「私は時々皆に何も言わずに部屋を出ていくけど、皆はダメって言わないよね？どうして？」と聞くと、一度シーンと静まり、Sくんが「先生はお仕事があるから出ていってもいいんだよ」と話します。保育士は「なるほど、つまり理由が分かれば部屋を出てもいいってことだね」と聞くと「理由があればいいと思う」と口にする子どもたち。「皆は先生が何も言わなくても、お仕事があって部屋を勝手に出ていってるって理解してくれるんだね、ありがとう」と伝えるとニマニマと嬉しそう。
「じゃあ、先生以外の人が勝手に部屋を出ていったとしても、そうやって気持ちを考えてあげられるといいね」と伝え、活動に移りました。するとその日の活動中にいつも部屋を出ていってしまう配慮児童を見てRくんが「ねえ先生、〇〇くんは隣のクラスのダンスが気になるんじゃない？」と話します。決まりの持つ本当の意味を一緒に考えると、こうも子どもの姿が変わるものか、と思わされた瞬間です。

＜乳児クラスからできること＞

・朝の会で無理に子どもを座らせない。
・「座る時間」から「楽しくて自然と集まりたくなる時間」へ
・「座ります！」ではなく、座れない理由を代弁する

保育士が子どもをルールや決まりの枠に収めようとする姿は間違いなく子どもに伝わります。

～ディスカッション～

今までの朝の会を振り返ってみましょう。

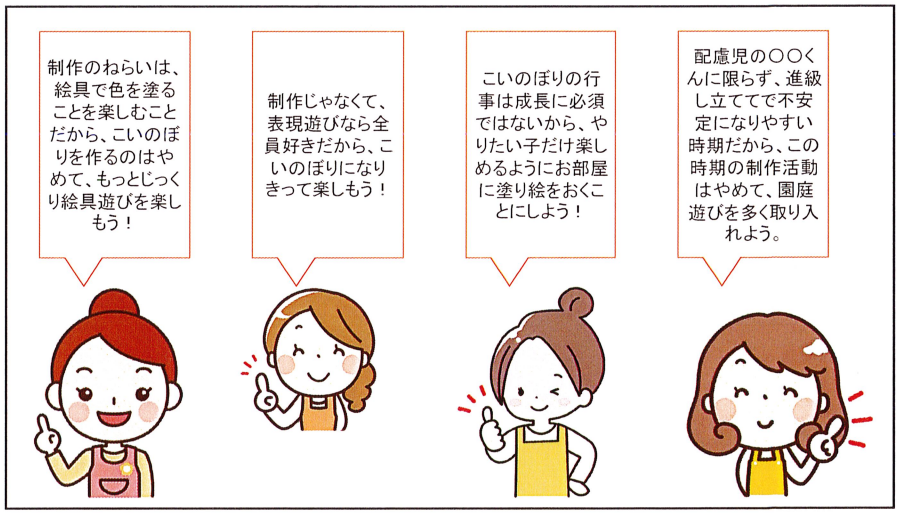
“気になる子”が目立ったり、排除してしまうような、
無意識的な空気はありませんでしたか？

配慮児がいる、いないに関わらず、今のやり方をどう改善したら、よりよい朝の会になるか考えてみましょう。

主活動

①主活動の際に、一人ひとりの得意不得意に配慮し、それぞれが最大限力を発揮できるよう役割分担しながら進めることが当たり前になっている

②主活動の際に、全員で同じ活動をするのではなく、クラスの中で各々がやりたいことに基づいたチームを作って活動する時間がある。



～ディスカッション～

今までの主活動を振り返り、“気になる子”や“配慮児”に対して困りごとを感じていた場面を思い出してみましょう。

今日の研修をヒントにどんな工夫ができますか？

今まで自分がもっていた子どもを捉える基準や、保育を考える基準を柔軟に広げながら考えてみましょう。

＜行事の在り方を見直す＞

・日常の延長線上に行事を
・練習して覚えるもの、という考えをやめる
・大切なことは、本番の姿ではなくどんなプロセスで取り組んできたか

＜「1番がいい」は必ずしもこだわり行動ではない＞

・並び順の1番、取り組む順の1番、1番にこだわるのは、1番の方が得をしていると、子どもたちが感じているから

・多様な1番を伝える

＜その子の姿に対する手立ては、本当に適切か？＞

・事後対応ではなく、事前に察知する

・マイナスな姿を改善するだけが手立てではない

・スモールステップを意識する

・その子の成長だけでなく、その子の周囲やクラス全体を育てることも、手立ての一つ

＜配慮児への保育士の声掛けや態度は、周囲の人の配慮児の見方に影響を与えている＞

・人は理由が分からない行動に対して“気になってしまうもの”

・保育士が困っている様子を見せてしまうと、周囲は“あの子は保育士を困らせる子”と感じてしまう。

・配慮児の気持ちを常に代弁する事で、その行動の理由が見える化される→その子への周囲の理解が深まる。

＜プラスの気持ちで家庭に引き渡す＞

・発達障害の子の中には、「記憶力が高く、嫌だったこと辛かったことは二度と忘れない」という特性がある子がいる。
そこで、園で号泣したりパニックになった日は、その嫌だった記憶を楽しい記憶で上書きしてあげることが大切。

＜保護者の立場になってみる＞

・自分が配慮児の親になったつもりで、どんな手順でどこに電話すればいいのか、実際に電話先ではどんな対応をされるのか、体験してみる。

①技術　→　意識

大切なのは発達を支援する事だけでない。
心を支援すること、行動を支援すること。
★発達の支援は、専門機関と連携を

②個の能力を育む→個々の違いを理解し合うクラス作り

支援のゴールは、多様な友だちと出会い、その子たちが個性の違いを理解し認め合って共に生きていくこと
★セーブパーソンを作ろう